

## 「光と影」の教材化と実践（第二報）

— 造形活動における展開と実践の考察 I —

○ 飯村 静江 尾崎 春人 安保 貴子（銀嶺幼稚園）

## I. はじめに

私達の日常生活の中に、常についてまわるものとして影がある。そしてそれは水や空気と同じで、存在そのものを余り意識せず、当たり前のように捉えているところがある。

影は太陽や月、燈火などの光、物体によって光が遮られた暗い部分、そして物体の形や色が映って見えるものとされている。しかし影は視覚的に捉えられるにもかかわらず、つかみ取ることはできず、影を自由に切り取ったり、他の場所へ移すことができない。そして影はどこから来てどこへ帰るのかなどそれはミステリアスな要素をたくさん持っている。

日本人が“かげ”をどのように認識しているかをその言葉の意味や使い方から見ると、“かげ”には“影”と“陰”という使い方がされており、両方に共通して言えることは、“目立たない存在”として捉え、そして「陰で悪口を言う」「陰で糸を引く」「影が薄い」というように、悪意や弱る、死といったマイナスイメージで捉えている面と、「陰になり日向になり」「陰ながら」「お陰様で」とひそかな思いや心の有り様として捉える面がある。

日本でも古くからポピュラーなあそびとして、あそび継がれてきた影絵あそびや影ふみは、言葉の意味や使い方といった心理的側面から生まれたものというよりは、自然環境や家屋の構造、障子文化などがその背景として生まれてきたように思われる。

今回「光と影」という教材を、自由な形で子ども達に投げかけ、影を扱ったあそびや創作、造形活動を計画した。その過程を通して、想像力や知的思考力を刺激する方法として「光と影」が、どのように生かされたかを考察したい。

## II. 造形活動への取り組みと子どもの姿

- a. 実施期間 1995年10月11日～11月 7日  
 b. 実施内容 1クラス35名の3, 4, 5才児  
 異年齢構成による5クラスが、次のような取り組みをした。

A組 影あそびや絵本を通して、子どもは「光があれば影がある」「影の中に入ると影が消える」など実物がつくる影の意外性に気づいた。保育室の窓から差し込む光によって出来る机や棚、教具など

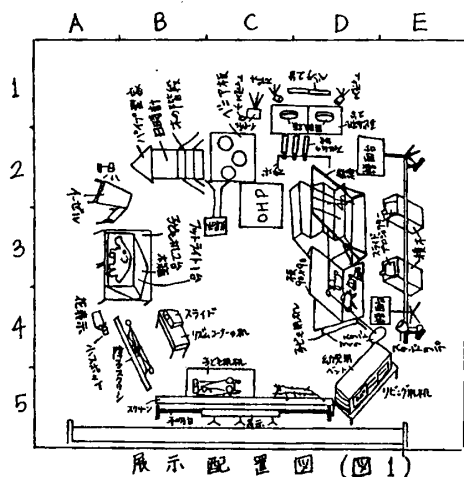
の影の面白さから、光をスポットライトで作リスクリーンを通して自分たちの好きな影作りに取り組んだ。はじめは一つの実物を色々な角度から光を当て、二つ、三つと数を増やし、重ねたり並べたりして影づくりをした。その経験の中から、「何か物を表現する」ことを思いつき、園内にある積み木、遊具、布、テーブル、針金、洗濯ばさみ、脚立などを並べ、重ね、テープで貼るなどして、何をどこにどう使ったら怪獣らしくなるか、あれこれ試したり、アイデアを出し合い、「怪獣対ドラゴン」を造り上げた。更に臨場感を出すためにOHPで背景を映し出すなどの工夫をした。

（図1-5-B～Dの部分）

B組 影ふみ、絵本、OHPを使って影を見たり映す経験を通し、子どもたちは光と影の存在に気づいた。その中で、「映画はどうして映るのだろう」という疑問をもった子の言葉がきっかけとなり、動画づくりに挑戦することになった。

幅8.8 cmの紙に縦6 cm×横5.7 cmの画面が13枚繋がった映画フィルム状の用紙を用意し、それに自分の好きな絵を描き、回転台の上に乗せて回してみると、絵はどのように見えるかを試してみた。その結果、どんな絵にすると動いて見えるか、表情を変えるにはどうしたらよいか、回転の速度によって見やすさに違いがあることなどに気づき、工夫した絵を描いたり、繰り返し試したりした。又見る焦点を一カ所に集中する方が、より動画としての効果を高めることに気づき、筒状の覗き穴を作ったりした。（図1-1-C, Dの部分）





展示配置図 (図1)

C組 晴天の日に庭に出て、自分の影であそんだり、友達の影や物の影を割り箸を使ってなぞったり、人の影を物を使って作ったりしたことをきっかけに、影当てゲームや影づくりをしてあそんだ。その中で変化のある多様な投影面と光の位置や光の当たる物の角度を変えることにより、意外性に富んだ影ができることに興味を持った。そこで、階段など変化のある投影面にははさみ、歯ブラシ、ホッチキス、フォーク、洗濯ばさみなどをぶらさげ光の位置や物の角度を変える物には、植木鉢とスポンジ、洗濯ばさみを使い横から見るとアヒルの影、正面から見ると花瓶に見えるというものを作った。変化のある投影面では長い影、ジグザクに見える影などができ、影の不思議さに興味をもった。(図1-3-Eの部分)

D組 影であそんでいるうちに、影の位置がゆっくり時間の経過とともに移っていくことに気づいた。丁度年長児は太陽系についての話題に興味をもっていたこともあり、地球が自転し、朝、昼、夕刻へと日が移るにつれ、影の位置が替わることを知った。それを確かめる方法として影時計を作ることになった。屋上に90cm四方の板に紙を貼り、三角板を立て、磁石と時計を置いて、白紙の上の影の位置を一定時刻に印をし、時計の目盛りとしたゆっくり移る影の位置が時計の役目をするにすぐに気づき、これをヒントに自分の影時計を画用紙で作ってみた。作り始めた10月半ば過ぎと11月では、影の位置が同じ時刻でも一致しなくなったことに気づいていった。光と影の関係をを超えて太陽と地球の位置関係に気づく大切な経験に結びつけばと思った。展示のための光源は天井に設置してあるスポットライトをやかい、子どもたちがそれぞれ工夫した針の部分が影時計に映し出され面白い雰囲気を出していた。

(図1-1-B, C部分)

E組 外に出て回りを見回すと、どんな物にも影があることに子どもたちは気づいた。走るとついてくる影、自分と同じに動く影、子ども達と影あそびをする中で、どんなにカラフルな洋服や物でも、影になると真っ黒になること、穴があいていたり、透明なものは光を通し、影ができないことに改めて気づいた。そこで、透明フィルターを使い、スタンドグラスを作ってみることになった。全紙のラシャ紙に子ども達の好きな「ぞうのエルマー」をデザインし、影の部分を残し、セロファンを貼って仕上げた。光は蛍光灯のフットライトを使用し、影と色フィルターの美しさをひきたたせるようにした。(図1-3-Aの部分)

以上5クラスの造形活動の過程を、11月3日の造形の日に展示(図-1)し、色々な角度から「光と影」に対する活動を園児、保護者に体験してもらった。



### Ⅲ. 考察とまとめ

(1)造形活動から2ヵ月後、男35名、女26名、計61名の年長児を対象に、①影ってなんですか?、②影はどうしてできますか?についてインタビュー形式による調査をおこなった。その結果①の質問に対し、影は同じように動く、真似る、ついてくるといった回答が37件、次いで影は黒い、色がないなどが34、その他雨の日や暗いとできない、影は映るものなど31項目に亘る回答があった。②については太陽、お日様があるからできると回答したのが45、明るいところや日向でできるなどと回答したのが13、電気や懐中電灯でできる12、光が照らすとできる10、その他で計23項目の回答があった。この回答の内容結果から、子どもたちが影であそび、光と影を使って活動経験したことが、想像力を刺激し、知的思考力を刺激する結果に導かれたと思う。

(2)「光と影」の教材化は、子どもに自由な形や方法で繰り返しあそび、試し、造るという経験を通し、子どもの興味や関心を引き出すための、保育者の認識、ヒント、環境設定などの配慮が重要なポイントになる。